

和算の系譜

和算とは江戸時代に発達した日本独自の数学です。中山町にも幕末から明治にかけて算家と呼ばれる研究家がたくさん輩出されました。また、「算額」といって和算独自の風習で、寺社に奉納した絵馬があります。それには和算の問題と回答が書かれてあり、本町でも柳沢に現存しています。

そこで最初に和算のおこりと諸流派について、簡単に説明しましょう。日本の最初の数学書は『塵劫記』といいます。京都に住む吉田光由が寛永4年（1627）に書いたものといわれています。しかし、数学的な学問はそれよりはるか以前に芽生えていました。中国から伝来した「そろばん」や「算木」がそれを物語っています。奈良時代の大学寮における数学教育や九回の計算、平安時代の『口遊』、鎌倉時代の碁石遊び、室町時代の数学遊戯などの流れを経て江戸時代に至ります。和算

誕生の記念碑として寛永18年（1641）に出された『新編塵劫記』があり、その後もたくさんの人々によっていろいろな本が出版されました。

そして画期的なものとして、数係数一元方程式の解を求めするための数学的手法が研究され、「天元術」が提示されました。この「天元術」について算家の間で論争が展開されるようになったのです。

【用語の説明】

【口遊】…平安時代中期に作られた児童向けの教科書

【天元術】…13世紀ごろ中国で発達した代数学。未知数を「天元の一」と名づけたところから呼ばれた。未知数を含む代数方程式を立て、算木を用いて解くことにより多くの応用問題を扱った。

※引用 中山町史 中巻

第10章第2節 教育

私たち地域おこし協力隊です！ No.52



雪囲いが設置されたり、干し柿が吊されたりと冬の足音があちこちで聞こえる時期になりました。先日むら熊さんと味噌の焼きおにぎりをいただきましたが、肌寒さのせいかひとしお温かく感じました。

かつて味噌は各家で造られるもので、昔の味噌造りの様子を覚えている方も多いでしょう。九左衛門家でも惣右衛門家でも味噌造りが行われていました。九左衛門家には味噌造りの上手な方がやって来ていたそうです。また、惣右衛門家には味噌などを寝かすために使われたミソグラが今も残っており、味噌を造って3年ほど寝かせ食べ頃となると、ウラグラへ移して保管していました。



ミソグラで味噌を寝かせ、奥のウラグラに移して使いました（旧柏倉惣右衛門家住宅）

味噌は醤油や酒などとともに食材として使われたほか、火傷の特効薬としても使われました。「味噌をつける」という慣用語はこれに由来します。

次のような民話があります。ある所に力自慢の男がいて、いつも力仕事を手伝い村人を助けていましたが、力自慢をするので村人とうとましくも思われていました。ある山小屋に泊まり込んだ翌日、山仕事に邪魔な大岩を動かそうとしましたが、力が出ません。男が思い切り力で大岩が少し動いた途端、足を滑らして大岩の下敷きになってしまいました。そこへ男の母親が駆けつけて言うに「毎朝欠かさず味噌を食べていた。今日は味噌を持って行かずに食べていないから力が出せなかったんだ」と悲しみました。

冬本番、納豆汁や土手煮など、味噌汁以外にも温かい料理で活躍する味噌で力をつけて乗り切りましょう。

●協力隊への問い合わせ先●

伊藤 ☎662-2114（産業振興課）／ 稲垣 ☎662-2235（教育課）／ 高橋 ☎662-2223（総務広報課）